

※ 原文を尊重し、なるべくそのままの文章で表記しています。

※ ( ) 内は補足説明

## 忘れまじ

### 学童疎開

私の生まれは荒川区、隣組の人達が皆、家族のような下町で幼少期を過ごしました。

昭和十九年（1944年）夏、私が小学校（国民学校初等科）三年生の時でした。夜中に度々、警戒警報のサイレンで起こされるようになると、子供達は地方へ疎開をさせられ、私も福島県の土湯村（現・福島市土湯温泉町）に学童疎開をする事になり、八月の暑い夜、尾久駅おくえきから夜行列車で旅立ちました。見送りに来た母親達は、今生の別れと覚悟を決めたように、我が子を抱きしめて泣いていましたが、セーラー服にモンペ姿でリュックを背負った私達は、これから体験する日々の事など考えもせず、遠足気分ではしゃいでいたものです。

山に囲まれた静かな土湯村つちゆむらでは、空襲の心配は無かったものの、月日がたつにつれ食糧事情が悪くなり、淋しさと共に空腹の辛さに耐えねばなりませんでした。毎日の食事はごはんの中ににがい「じゃが芋」がたくさん入っていて、そのにがさがのどを通らなかつた程でした。誰もがいつも空腹で口に入るものは何でも、歯みがき粉も食べてしまったものです。

ある時、地元の農家の計らいで、近くの山へ栗拾いに行ったのですが、帰って来た時、殆んどの子が一粒の栗も持ち帰らなかつた、つまり帰り道で皆、生のままの栗をかじって食べてしまったのです。私達の頭の中には、いつもまんじゅうや、せんべい、あめなどがぐるぐるとうずまいているようでした。

冬になると土湯村つちゆむらは雪に閉ざされ、とても寒く、火の気の少ない部屋で、寒さと空腹とその上シラミともたたか 斗ながい乍ら、それよりも尚、母親が恋しくて会いたくて、気がつくといつも誰かが部屋の隅で泣いていました。我慢できなくなると母に手紙を書くのですが、淋しいとか会いたいとか、食べたいとかの文字は先生のチェックで書き直されてしまいます。東京の生活はもったきびしいのだからと諭され、親を心配させないよう、「私は元気で毎日楽しく暮らしています。」と書くのでした。それでも母に甘えたかった私は、町の郵便局のポストに出しに行くのですが、母からの返信をチェックされ、又注意をされるのです。母の手紙には「東京も食べる物が少なくなって、皆苦しんでいるのだから、あなたも辛いだろうけど我慢してね。」と書いてありました。私は、もうこれ以上母を困らせてはいけないのだと悟り、悲しそうな母

の顔を思い浮かべ<sup>なが</sup>乍らあきらめるしかなかったのです。

二月のある日の母からの手紙には「今年はおひなさまを飾れません。おひなさまも箱の中できっと泣いていると思います。いつの日か戦争が終ってあなたが東京に帰ってきたら、すぐにおひなさまを飾ろうね。おひなさまもあなたに会いたがっているよ。あなたの好きな”ごもくずし”を作ってお祝いしようね」と。でもおひなさまは、戦火に消えたのです。

又次の手紙には「きよちゃんが『ねえちゃんは?』と云ってるよ。」とも。妹にも会いたい。早くだっこしてあげたいと思いました。

又ある時、二人の男の子が家に帰りたくて夜中に宿舎を抜け出したものの、暗い川岸で足を滑らせたのか、急流に流されて亡くなってしまった事がありました。皮肉にもその川の名は「荒川」でした。

そのような生活にもいつしか慣れてきて、と云うよりやっとながらあきらめがついたのでしょう、私達の宿舎の一つ一つの部屋には、男の子達には、「突撃隊」「若鷲隊」等、女の子達には、「銃後隊」「大和撫子隊」等、勇ましい名前がつけられ、「欲しがりません勝つまでは」等の相言葉の元に、皆がんばっていたのです。夜になると皆が集まって、「若鷲の歌」や「暁に祈る」の軍歌を大声で合唱して励まし合っていました。

しかし、あの三月十日未明、東京大空襲で荒川区は殆んど焼けてしまい、大勢の犠牲者が出た事を知らされ、皆不安と恐怖にがたがたとふるえ<sup>なが</sup>乍ら「母ちゃん!!母ちゃん!!」と泣き叫んでいました。

そして私達を更に不安にさせたのは、焼け出された子供達が十数人私達の宿舎に入ってきたのです。火の中を逃げまどい、家を焼かれ、中には親が亡くなった子もいて、恐怖と不安と悲しみを体いっぱいにかかえ、着換え一つ持たずに、汽車にゆられてたどり着いた子達、その夜は皆いっしょに泣き明しました。私も東京にいる両親や祖父母、幼ない弟や妹達がどうしているのか、安否も解らず不安でいっぱいでした。

数日後、私の家族が無事だった事、母と幼い弟妹達は、焼け出された後、千葉県の実家へ疎開したと聞きほっとしました。

五月になり、土湯村に遅い春が訪れた頃、私は母の実家へ行く為に、帰京する事になったのです。桜吹雪の中を友達や、先生、保母さんに見送られ、迎えに来た父と共に、土湯村に別れを告げました。

## 空襲の夜

帰京する汽車の窓から見た東京の変わり果てた姿に、私は息をのみました。見渡す限りただ瓦礫だけの焼け野原で、遠くにたった一つコンクリートの建物が見え、それが私達の小学校の残骸なのだと父親から聞かされ、更に、これが三月十日未明の大空襲の跡だと知り、がくぜんとしました。

新宿区の仮住まいの家でも夜中には、サイレンの音におびえていましたが、数日後に又東京は山の手に大空襲を受けたのです。空襲警報の不気味な鋭いサイレンの音、ラジオからくり返し流れる緊迫したアナウンサーの声、「大本営発表……」「B29の編隊が東京上空に向かって……」等々。やがてゴーゴーとうなりをたてて近づいてくるB29。私は祖母と二人でしっかりと手をつないで家を出、町内会の防空ごうに入ったのですが、何故か祖母が不安を感じ、二人でそのまま逃げ出しました。まっ暗な空にはB29の編隊が見え、無数の焼い弾が落ちて来て、やがて火の手が上がり、大勢の人達が暗い方に向かって走り出すと又、その方角から火の手が上がるのです。焼い弾が落ちる時、油と風が発生するのか、建物を激しく燃やし、燃え乍ら大きな火の塊になって吹き飛んで来るのでまるで火の川のようにでした。

途中で警防団の人が、各家庭の前に置かれている防火用水の水を、バケツで頭からかけてくれるのですが、三十分程で乾いてしまうのです。火の海の中をあちらへ走り、こちらへと逃げまどううちに、私のランドセルにも火がついてしまい、祖母が大事そうに持っていた風呂敷包みも、みんな捨てなければなりませんでした。かぶっていた防空頭巾は風で飛ばされそうになり、火と煙で目の痛みが激しく、見開いている事も苦痛でした。火の海の中から、はぐれた我が子を探がすように、「よし子ちゃん」と何回も叫ぶかん高い女性の声、続けて「アハハハ……」と笑い声がひびき渡るの、恐怖のため狂ってしまったのでしょうか。又、焼けただれたような顔を手で押さえ乍ら、火の中をふらふら歩く人、うめき乍ら倒れこんでしまっている人もいて、まさに地獄でした。

恐怖の一夜が明け、自分達の居る場所も解らず、祖母が行き交う人に道を尋ね乍ら、歩き続けました。まだくすぶっている焼跡を、時には遺体に目をそむけ乍ら、やっと戻る事ができたのですが、上衣や防空頭巾の焼けこげの跡を見て、よく生きて帰れたなァと子供心にも思いました。私達が入っている筈だった防空ごうにいた人達が、皆亡くなられたと、町会長さんから聞かされても、現実の事のような気がしませんでした。

その日の夕方、焼け野原を見<sup>なが</sup>乍ら、父が、「よーく見ておくんだよ。これが戦争なんだ」と云った言葉が今も心に残っています。私はただぼう然と、夕焼の空にカラスが飛んで行くのを見上げていました。

## 戦後の生活

着の身着のままの姿で、千葉県の実家へたどり着いた時、出迎えた母の、涙をポロポロ流し<sup>なが</sup>乍らの笑顔。やっと母に会えた、「母ちゃん」と叫びたいのになぜか声になりませんでした。母の後からチョコチョコと歩いてきた小さな妹、可愛い大好きな妹にも。

東京へ帰る日まで母と私達兄弟六人が、母の実家に世話になり、身を寄せ合って暮らす事ができました。

昭和二十年(1945年)八月十五日、暑い日でした。みんなでラジオの前に正座し、玉音放送を聞いて、戦争に負けた事を知ったのですが、敗戦の悲しみよりも戦争が終わった事に、誰もがほっとしたのだと思います。

天皇陛下のお言葉はむずかしく、その上ラジオの感度が悪くて、意味はよく解らなかつたのですが、唯<sup>ただ</sup>「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」との言葉がかすかに聞こえました。

しかしそれからの東京での生活は大変でした。戦災で全てを失い、父親は職を失い、両親と祖父母、私たち六人の兄弟、十人の大世帯で、やっと見つけた杉並区の狭い家で、どん底の生活が続きました。夏は女の子でも家では裸ん坊、冬は薄着のため風邪ばかりひいていました。三度の食事は二度になり、種芋にするような水っぽいさつま芋、芋のつるや雑草も採ってきて食べ、「普通のごはんが食べたいなァ」としみじみ思ったものです。それでも母は子供達を励ますように、「さあ、今日のお芋はおいしいよ。」と云うのですが、それもうつろに聞こえるのでした。空腹のため体がだるく小学生の子供なのに、みんなで昼間でも寝ころんでいました。電力事情も悪く、電灯がつかないので、日暮れと同時に寝てしまう長い夜も度々でした。

学校では給食は無く、脱脂粉乳とか云うミルクをコップ一杯支給され、それでもそれが私たちの楽しみの一つでした。

教科書は、それまでの軍国主義を称える文章や、神国日本などと云う文は、全て墨で消すように云われ、まるで意味の解らない、ちぐはぐなとても変な教科書でした。しかも上級生から下級生へと下げ渡すの

です。何よりも今まで教えられ、その通りに信じきってきた事が、全てくつがえされた事に、子供<sup>なが</sup>乍ら理解するのがとても大変でした。

今思えば、子供達がこんなにも苦しく、恐ろしく、悲しい体験をし<sup>なが</sup>乍ら、何のケアもされなかった事も、その中でたくましく生き抜いて来た事も不思議な事です。しかし子供達よりも、父や母たちはもっと苦しかった事でしょう。苦しみを訴える術も無く、世を去って逝った人達の事を思うと胸が痛みます。

戦争は二度としてはいけない、正しい戦争などあるわけが無いのです。まさに、「戦争ほど残酷なものは無い、戦争ほど悲惨なものは無い」のです。

夕風に さそわれゆるる 萩の花 遠き疎開の 母恋う庭にも

千代紙を 折りつゝ思う 遠き日の 戦火に消えし ひな人形を